旧制台北高等学校
同窓会誌
『蕉葉会報』

旧制台北高等学校（1922年4月～46年3月、通称 台高）の卒業生及び在校生による同窓会＝蕉葉会（本会事務所は東京）の会報誌を復刻！

B5判・上製本・総1、074頁
解　　題：河原 功（一般財団法人 台湾協会参与）
原本提供：一般財団法人 台湾協会
定　　価：66、000円（本体価格60、000円＋税10％）
ISBN978-4-8350-8565-4
2022年6月刊行

不二出版

台北高等学校同窓会誌について

阿部 洋（国立教育政策研究所名誉所員・福岡県立大学名誉教授）

このほど、旧制台北高等学校の同窓会誌『蕉葉会報』全一〇七号が三巻にまとめられ復刻された。原本編者は同校卒業で、同窓会の運営に長く携わり会長も務めた蔵本人司氏。

台北高等学校は、戦前期日本の植民地における唯一の高等学校で、一九二二年台湾総督府により設立された。同格の学校に京城帝国大学予科がある。

戦前期の学校制度では、高等学校は帝国大学・官立大学につながるエリートコースの中核に位置する高等予備教育機関で、全国に三十四校あった。大半は高等科（三年制）で、尋常科を併せ持つ七年制は九校のみ。台北高等学校はその一つである。同校は一九四五年敗戦による閉校まで、二〇余年にわたり存続した。卒業生（同窓生）は二、四〇〇名（うち台湾人は六五〇名）。キャンパスは現在国立台湾師範大学に受け継がれている。

同校の教授陣には、『次郎物語』の下村湖人や『万葉集』研究者の犬養孝らがあり、彼らのすぐれた指導のもと、生徒たちはかなりリベラルなカレッジ・ライフを享受。その中から上山春平（歴史家）・武谷三男（理論物理学者）・園部逸夫（最高裁判事）など、多彩な人材が輩出した。邱永漢（作家・経済評論家）や李登輝（中華民国総統）の名も見える。彼らの活動は、『蕉葉会報』にもよく反映されている。

『蕉葉会報』は、一九六一年同窓会の発足と同時に発行され、一時中断をはさんで二〇一三年まで五〇余年にわたり継続刊行された。その内容や意義については、巻末に付された台湾文学研究者・河原功氏の解説に詳しく紹介されている。

台北高等学校については拙編『日本植民地教育政策史料集成（台湾篇）』（全十二期・一二一巻）に学校要覧や関係公文書を収録、その設立運営状況について検討した。

『蕉葉会報』は、これら公文書類からは窺い得ない当時の同窓会や会員の活動状況などを詳しく伝えており、植民地期台湾の教育史研究を深めて行く上で貴重な資料である。

旧制台北高等学校創立一〇〇周年を祝して

川平朝清（台北高校卒業生 昭和女子大学名誉教授、元沖縄放送協会 ＯＨＫ会長・ＮＨＫ経営主幹）

二〇二二年は、旧七年制台北高等学校卒業生にとって、創立一〇〇周年を祝う年となります。

日本の敗戦を機に、母校はその二三年の歴史を閉じました。日本人のほとんどは、台湾からの退去を命じられ、一時は中華民国への「光復」を喜んだ台湾人卒業生、在校生は裏切られ、三八年に及ぶ戒厳令下の苦渋を味わうことになろうとは、誰が想像したでしょうか。

一方、日本に引き揚げた卒業生・在校生たちは、それぞれに人生を切り開くための時間を要し、全国規模の同窓会組織「蕉葉会」が結成されたのは、戦後一六年も経った一九六一年の事でした。同時に発行された『蕉葉会報』は先生方、同窓生の消息、業績を知り、会員の絆を強める貴重な媒体となったことは否めません。

その「蕉葉会」も会員の老齢化とともに、総会出席者も減少の一途をたどり、台湾での創立八五周年記念（二〇〇七年）には日本からの出席者はわずか九名という状態でした。

台北高校の敷地・校舎を継承した国立台湾師範大学では、台北高校の「自由・自治」の綱領を大学の綱領として採択し、さらに一九二二年をもって師範大学の創立年とする事を決めました。そのことを伝えるため、二〇一九年四月には呉正己学長一行に、台湾側同窓会の辜寛敏会長が来日、「蕉葉会」の後を継いだ「蕉兵会」において発表され、私たち会員と会友は謝意を表しました。

創立一〇〇周年にあたり、「台北高校戦後史」とも言うべき『蕉葉会報』を復刻してくださる事は、単に卒業生や遺族のみならず、台北高校をテーマにする研究者にとっても、有意義この上もない事で、感謝をもって推薦するものです。

▲国立台湾師範大学・呉正己学長の来日時写真。中央・呉学長、学長の左隣・徳丸薩郎蕉葉会副会長、右隣順に川平朝清氏、蕉兵会世話人・竹内昭太郎氏、園部逸夫氏、後列右端・蔡錦堂氏。（鈴木玲子氏撮影）

内容見本

訃報

柳田謙十郎先生　昭和五十八年一月十六日逝去
一條重美兄（三文甲）　昭和五十八年五月二十一日逝去
野村靖夫兄（四文甲）　昭和五十八年十月二十一日逝去
高橋信雅兄（四理乙）　昭和五十七年十一月八日逝去
吉村良司兄（五文甲）　昭和五十八年三月四日逝去
坂内良三兄（六理甲）　昭和五十七年九月二十三日逝去
中川龍一兄（八理甲）　昭和五十八年四月七日逝去
内田寿雄兄（八理甲）　昭和五十八年四月四日逝去
内保一郎兄（八理乙）　昭和五十八年四月二十九日逝去
土屋理正兄（十二文乙）　昭和五十八年十一月一日逝去
渡辺昭二兄（二十理甲）　昭和五十七年八月四日逝去

本部だより

○　先づもって、会員諸兄のご健勝を心からおよろこび申し上げます。また、病気療養中の会員諸兄のご静養と、速やかなご回復をお祈り致します。

○　白北高等学校創立六十周年記念祭を終え、早や一年が経過し、再び神田学士会館において、本年度の蕉葉会総会を迎えようとしております。そして四年後には、六十五周年ということですが、その時には、小規模でもあっても奚のある記念祝典をやらねばと思って居ります。

○　いつもの口癖ですが、新会員の加入は年々減少していく同窓会ではありますが、最後の最後までその力の続く限り、我々の生命の中で一番懐しい親しみのある同窓会である蕉葉会を、今後とも、みんなで守り立てていきたいものです。

○　大学の会員が就業の職場をリタイヤし、新しい第二の道を進んでおられ、四五年後には、ほゞ全員に近い会員がその道を歩むことになります。それは、自分に培っての人生を楽しむ世界でもあることを思うとき、今後、趣味や運動（健康保持）等に繋りをもって結ばれることに力点を置くことも、同窓会の存在価値の一つとなるでしょう。

○　白北高等学校創立六十周年記念祭を終え、早や一年が経過し、再び神田学士会館において、本年度の蕉葉会総会を迎えようとしております。そして四年後には、六十五周年ということですが、その時には、小規模でもあっても奚のある記念祝典をやらねばと思って居ります。

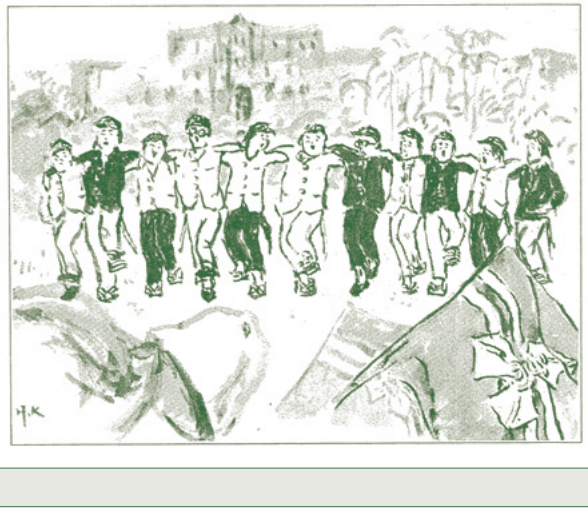
○　いつもの口癖ですが、新会員の加入は年々減少していく同窓会ではありますが、最後の最後までその力の続く限り、我々の生命の中で一番懐しい親しみのある同窓会である蕉葉会を、今後とも、みんなで守り立てていきたいものです。

○　大学の会員が就業の職場をリタイヤし、新しい第二の道を進んでおられ、四五年後には、ほゞ全員に近い会員がその道を歩むことになります。それは、自分に培っての人生を楽しむ世界でもあることを思うとき、今後、趣味や運動（健康保持）等に繋りをもって結ばれることに力点を置くことも、同窓会の存在価値の一つとなるでしょう。

○　白北高等学校創立六十周年記念祭を終え、早や一年が経過し、再び神田学士会館において、本年度の蕉葉会総会を迎

原稿募集

一　会報の原稿を募集しております。種類を問いません。
二　応募は、原稿用紙を用い、できるだけ、一行十八字詰めでお願いします。
三　甚だしく不適当なものにあっては、あるいは訂正、削除をすることがありますことをご諒承下さい。



中村為吉先生の思い出

（昭七理乙卒・旧姓福尾）　久富良次

中村為吉先生は私共昭和四年に入学した理科乙類の級主任で一年生のときは毎日ドイツ語で大いに鍛えられた。アーベ、ツェ、ペの第一歩から先生のあの村長あるロ唇の動きに私共は注目し、或時は前日の暗誦が満足に答えられなくてひどくお叱りを受けたこともあり、又或時は先生のユーモアに引き込まれて爆笑したこともあった。

下に掲げる写真は理乙二年のクラス会で私がカメラ組立箱を持出して写したもので、今では笑い草のようなミズ、関光球と称するマグネシュームの入った小袋に紙の薄光球がついたものにマッチで点火して、ジージーパーンと酸化したもの白煙をまき上げて夜間撮影したもの、懐しいクラスの面々に囲まれて前列中央に和服姿の中村先生が若々しく写って居られる。思えば、三十五年の昔である。写真では判りにくいが先生の前にあるのは先生が即興にこしらえたご自分の似顔絵で、ａｂｃｄのウムラウトの音がロから出ている所を描いてある。先生のドイツ語は実に美しい発音で、どうしても真似られないｒの音の極めて軽い発音であった。先生がベルリンの公園でベンチに腰かけていた時、隣りに居るドイツ人がしきりに話かけるのでそれに答えた所「あなたはドイツ人だろう」と言うので「いや俺は日本人だ」と答えてもどうしても信用しないので、どうもおかしな事だと思って良く見たら相手のドイツ人は盲人だったという話は先生の自慢話の一つで記憶されている人も多いと思う。

先生は講義の間に時折ご自分は小学校を出てから絵手売りをしたりして苦学した事を話されたが、私は今回御令息中村克明氏（岡山県高梁市鍛冶町一一三）にお願いして先生の御略歴を知って頂いたことも先生の御略歴を知って頂いたことも来たので此処に記しておく。実は私は中村先生に特別に御厄介になったわけでもなく又特別に親しくして頂いたこともなく、平々凡々たる一学生であったから恐らく先生も私の事など印象に残っては居られなかったに違いない。

従って私のような者が中村先生の思い出を綴るのは全く当を得ていない事は百も承知ですが、数年前に私が私共クラスの卒業二十五周年記念アルバムを作った際故友岩淵喜彦君のすすめでその一冊を中村先生の御遺族に贈呈した所、御次男の克明氏から御丁重な御便りを頂き故為吉先生の逸話の数々をお知らせ下さったので、之は故先生を偲ぶ何よりの好資料と考えて拙文を草する気になった次第で、中村克明氏の御承諾を得て此処に転記させて頂く。（以下原文のまま）

父は中々気むつかし屋でしたが又ユーモーアな所も多分に持って居り法事に私の所に兄弟達が集った折父の思い出を語り合います。

父が台北に居りました折、父の近所には電話がある家が多く父の所には無かったあ近所の奥さん方母に「電話があれば不要な物も旺文に買ってあるから良し悪しだ」と話して居るのを父が聞いて「文明の利器の悪口を言う者は家へ来て呉れるな」と言ったので奥様はあわてて逃げ帰り父は母にられて父と母が菓子箱を持って謝りに行った話。

あわてものの父が袴を裏がえしにはいて気がつかずに居るので或人が「中村先生袴が裏がえしになっています」と注意すると父は、はき替えるのも面倒と思ったのか「ハカマをはいていると思うからおかしいのだ、僕のはいているのはマカバだ」と強情を張った話。

台北で父が年賀していると商人が原動機付の三輪車で品物を配達して来た音に夢をやぶられた父は、業足で三輪車を追ったが何分向うは機械力で追付けず、手紙で「出入お断り」を申出た所、先方から「以後静かに配達するよう気をつけろ」と言って来た事。

台北高校を辞し郷里に隠居して居った折、土地の有力者の婦人達が公娼廃止運動を起して居り母に賛成を求めに来たので「公娼廃止に賛成するような女房は今日直ぐ離縁だ」と父が言ったのに婦人達尾を巻いて逃げた話。

父が岡山の大学に、そ折、をさもオーバー無しに過して居ましたが蛇弘台北でオーバーを新調しと焚或人が「中村先生はオーバーを着ないと主義かと思っていたのに」と言うと父は「人一倍寒がりの僕だ、子供が大勢でオーバーまで手が廻らなかった」と言って笑ったとか、その父が俣瀬氏に「中学校に入ると立派なマントを作って呉れた事は今でも忘れられません。父は釣が大変好きで岡山に居る折私を連れてよく見島湾や下津井の力まで出かけました。

又夏休みには毎年のように郷里の湯浅湾鈴代にも淡水によく出かけ穿工程のす酒は殆どたしなます台北に参りますと正月などは私を相手に盃に二三杯程は飲みます。

私が初父が造り酒屋だったのに上申しますと紺屋の白持だと言って笑っていました。母の方は酒のいける系統らしく父よりは強く、母は私に薬だから少々は飲めと申し父は癖になると困るから飲むなと申していました。

苦学の事は父や母の話を綜合しますと独逸学校在学中父医学校に勤める間十年程相当苦しかった様な様子でした。母は父が医学校に勤めていた折結婚した様子でしたが、母の話では借金があり大変苦しかったとの事です。何分寄行の多い父に仕えた母は苦労が多かった事と思います。その母も、十二、三年程前に亡じました。平素天皇陛下の事など全く口にしない父でしたが終戦後日本で天皇陛下を忘れて日本人の敗戦後の日本の将来に心配していた父を見て、今まで知らなかった父を見た様な気がしました。

（編者　横須賀市大浦町一の六根本ビル三階　久富鎮科鈔郵便所）

で昨年も今年に持ち越されていたので、皆さんに無記名アンケートで問うたわけである。そして奥様方にもご亭主方と同じ1票をお願いした。その結果、

① 永遠に続ける　6票
② あと二～三年だけ　30票
③ 来年で終了　5票　（計41票）

このうち奥様方（18票）はご亭主よりご少かお若いのでと見て、残りが12票。これでは「あと二～三年このまま」が大勢である。となると来年か再来年あたりに「解散宴会」の年を決めることになるかもしれない。

□：私の記憶では昭和35年（1960）の京橋ブルニエ（中央公論社ビル地下）での会が敗後初めてだったと思うのだが、田中総幹事が設営された第1回昭和52年（1977）新宿住友ビル47Fからでも30年続けて来た（18年会）も、いよいよ終りに近づいてきたわけである。

西田機多郎さんの言葉に「すでに始めあり又終りなかるべからず」とある。これは昭和17年秋に岩波書店の30周年祝賀会に西田博士が寄せたものだが、同年同社の雑誌「思想」の戦時終刊号に載ったのを覚えている。

これは、『詩経・大雅蕩』の「靡不有初、鮮克有終」（初めからさるなし、よく終るはすくなし）からの引用らしいが、われわれ18年会もある程度元気なうちに締めくくりをすべきかも知れない。

□…斯くて宴会は、木元さんの音頭で「台高賛歌」を、「ゆ島のパミール」まで歌い、（第一校歌）で締めくくった。そして各宮に戻って存分に、ヨコハマの海の夜景を堪能されたかと思う。

なお翌日は希望者のみ（26名）が市内遊覧バス（半日コース）を楽しんだが、朝出発前の1時間ばかりを眼科の権威・横山貴さんが、目の診察をしてくださった。これは18年会毎年恒例の横山先生の大サービスで、ラホヤたちには誠に有難く感謝の極みである。

バスにはホテル前から乗車、ペイブリッジ・港の見える丘・赤レンガ倉庫等を廻って中華街「同発」で昼食、値段の割りには結構でした。午後2時横浜駅東口解散。

□…ところで蛇足だが、クラスメートの李登輝さんがちょうど来日中であった。当幹事としては、先方さんの台湾出発前に（18年会）の今年の出席者全員（夫人とも）の名を記して手紙を出し、「奥の細道」で忙しいでしょうから同期会へメッセージなりもいただければ嬉しいと要請したのであるが、残念ながら梨の礫であった。

更に、同7日にホテルオークラでの歓迎会で、壇上で一緒に校歌を歌ったあと、右の手紙について話したが、通じていなかった。おそらく秘書が煩わしくて握りつぶしたのであろうか。

（久松康二記）

李登輝前総統来日

十七回文甲　田口公明

李登輝台湾前総統（台北高校文甲、昭和一八年卒）が来日された。平成一九年五月三〇日から六月九日までの一日間であった。

折しも、六月四日、李登輝前総統が台北高校を卒業した年の（十八年会）が、横浜みなとみらいの「ヨコハマ グランド　インターコンチネンタル　ホテル」で開かれることになっていたので、私は、てっきり、李君が、それに合流されるものと思っていた。ところが、幹事役の久松康二、木村靖君からは、何もそんなことは伝わって来ない。

そこで、思い切って、今まで李君の世話を良くしていた新潟の伊藤栄三郎君に、尋ねることにした。伊藤君からは、「李君は、「十八年会」にはお出にならない」という返事であった。「李君は、六月七日に、東京のオークラ ホテルで講演をすることになっている。東京の李登輝の友の会が取り切っているが、その締切日が今日（五月三一日）なので、今日のうちに言えば、ひょっとして受けてくれるかも知れん。」

そこで、早速、東京の富田敏郎君に電話。彼は、留守であったが、夜になって、富田君の元気のいい声が聞こえた。彼の言い方は、沢山あったが、要するに「田口さんは、李登輝さんと同期生だから、どうしても参加して貰わなければならない。友の会がどう言うか分からんが、何としても参加して貰うから、待ってて欲しい」と言い、最後は、「私が、降りても良いから、田口さんには、行って貰うから」ということであった。私は、すっかり感激してしまい、それからは、李君に御協力できる古いアルバムのカラー・コピー造りに精を出して、友の会からの通知を待った。

五月三一日は木曜日であり、富田君が、あれから連絡を取っても、それから、友の会の通知を呉れるのは、下手をすると翌週の六月四日の晩日になるだろう、郵便物の発しめは、火曜日からになってはならないというようなことまでして、友の会の通知を

● 山田清司兄（14文乙）　平成8年7月5日逝去
● 尾上良愛兄（14理甲）　平成7年12月　逝去
● 宮崎忠次兄（14理甲）　平成7年12月7日逝去
● 土井康弘兄（14理乙）　平成8年11月2日逝去
● 伴野太郎兄（15文甲）　平成8年6月　逝去
● 井上　剛兄（15理乙）　平成7年12月3日逝去
● 黒木宣彦兄（15理乙）　平成7年　逝去
● 神田孝夫兄（17・9文乙）　平成8年9月　逝去
● 森　荘助兄（17・9理甲）　平成8年5月22日逝去
● 鈴木正義兄（20文甲）　平成8年6月11日逝去
● 内村昭二兄（20文甲）　平成8年7月30日逝去
● 加藤一郎兄（20入理甲）　平成8年8月14日逝去
● 三宅秀夫兄（尋4）　平成8年8月16日逝去
● 高橋知己兄（転校）　平成8年3月14日逝去
● 池田孝文兄（転校）　平成7年12月18日逝去
● 内田幸雄兄（転校）　平成8年5月12日逝去

右岡

第10回記念祭街頭宣伝

テニスコートから見た校舎

入試控室

七星寮の屋根から

裏から見た校舎

内容見本

躍した。

海外旅行が困難で、一ドルが三六〇円の時代である。滝口君は英語を話せるので代議士先生の欧州視察の世話役をおせつかった、苦労話に失敗や珍談をまじえて、欧州旅行を面白おかしく話してくれた。

滝口君の人生は英語に堪能であったと言う一本の筋が通っており、戦争戦後を通して、大活躍をした。英語力が彼の人生を豊かにした。

彼は功績により勲三等を授与された。ご冥福を祈る。

昭和五年理甲卒　川瀬　義和

武原清七兄のこと

五理甲　法水正文

武原清七兄には平成八年三月八日逝去されました。同兄は東大工学部卒業後東京電気株式会社に入り、昭和十六年より東京芝浦電気足立製鋼所に入り大いに活躍し、戦後も東芝製鋼所として勤務し、東鋼興業会社社長となり昭和四七年に退職されました。

武原君は円滑酒宴の人であったが、酒をたしなみ、殊に日本酒、赤提灯、会話が得意で料理の方にもなかなかやかましかった。昔本郷の下宿にゆくと天井には日本酒一升瓶のレッテルが一面に貼りつけてあり、また鴨居には飲屋のマッチが一列にすきまなく並べてあると言う面白い風景であった。酒の弱い私は彼の相手にされなかったが、晩年次第に年をとるに従いお互に旧交を温めるようになり、在京及び近県の昭和五年理甲卒業生クラス会を開くようになった。偶数月の第二金曜と言うことで、ぐにきん（偶二金）会と称し毎回各幹事武原君の世話で神田の学士会館で昼食をとり歓談した、後に会場を近くの如水会館に移し毎回夫人出席もあり一〇名余りの愉しい会合がつづいたが、次第に病身や遅歩で出席者が、今年になり激口、武原と両君が亡くなり幹事を失いぐにきん会は危急存亡の状態となった。毎年長崎から来京する荒木豊作（三菱重工）君を迎えて五月に会をやっているが、今年は両兄の供養の会になることになった。

武原君は六年前相立脳塞となったが、私は彼と共に一〇日間程年末にニュージーランドを訪れ真夏のクリスマス、お正月、南十字星、マリオ族の踊り、美しいマウントクックの山や氷河を眺め楽しい旅をした。帰国後直に小生勤務する玉川病院、帝京大学講口分院で治療を開始し初診時既に肋骨に陰影があったので手術はせず、制癌剤、ホルモン剤、放射線等保存的療法を我意行った。これが奏功し暫くはすきなゴルフもできるようになりよかったが、昨年春から腰痛背痛がおこり歩行も困難となり十二月末から玉川病院に入院しモルヒネ剤によるホスピス療法となり痛はとれたが、次第に衰弱し肺炎を併発し死去された。ご家族のお許しを得て島所の剖検をし、小生も立合ったが、原発巣は治癒していたが脳部には骨転移がよく肺炎もみられた。

彼の当意即妙、予想外の発言はいつも我々の会に笑をもたらしたのしくさせてくれたが、よき友を失い誠につまらなく寂しい感である。彼の工学部の友人のはなしでは渾名は宜なるかな「潤滑油」であったとのことである。

珍らしい写真四葉

昭和十九年文乙　泉　新一郎

舞ったのは昨年七月末のことでした。しかもここに掲載した写真をお借りし福迫・東島両先輩にいろいろ無会しご返事をいただきながら、報告が遅れたのは私の怠慢によるものです。

先生は一寸不自由な身になっておられるとはいえ、記憶も確かで、話すことも明晰。台湾時代のことをいろいろ話して下さった。特に、台湾に来られるまでの経緯を詳しく伺ったのははじめてのことです。

父はキリスト教の牧師をしておられ、神学校時代の友人に仙台出身の日本人が居り、日本のことをいろいろ聞く機会があったり、バージニア州のリッチモンド大学で学んだ時には、リー・シッククワンという中国人同級生がいたりで、日本・中国への憧憬をかきたてられたそうです。

ついで、サウス・カロライナ州のブラック・マウンテン大学へ移って中国史を専攻して卒業し、エンチユン（燕京大学？）を目指して本格的な研究のためハワイ大学大学院に入り、アンドリュー・リン教授の指導を受けることになりました。ここで出会ったのが終生の友嶺山政道博士でした。日本への道を開いてくれたのです。

東京での滞在中、日本美術に魅了され、その方面での研究に一時没頭、その成果は"Japanese Arts & Social Tradition"としてまとめられ、北星堂から出版されべく、ゲラ刷までは仕上ったが、日米開戦のため実現せず遂に幻の著作となっています。私はそのゲラ刷本を見せていただいたが、二十歳代半ばにしてこれだけのものをよくまとめたものだと感嘆させられました。

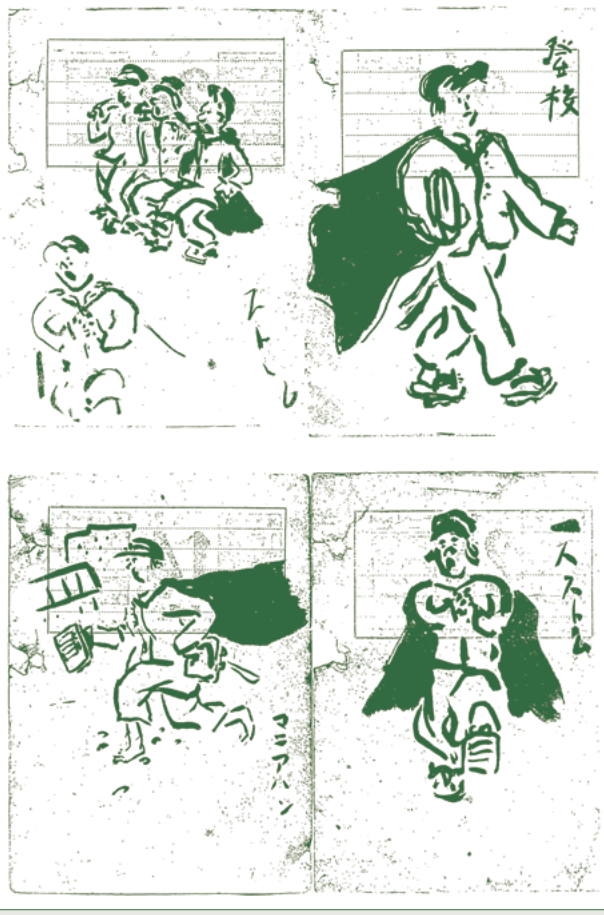
台湾へ行くことになったのは、当時台北一中で英語を教えていた友人が病気になったため、そのピンチヒッターを買って出たためでした。最初六ヶ月の約束だったものが、台北高校、台北高商でも教えることとなり、一九三五（昭和十一）年から一九四〇年までの六年間も滞在することとなったものです。

昭和14年 17・3文甲生達と

台高教室での若き日のカール先生

カール先生と川平夫妻

後列左から故日野原幸治（17・3文甲）、望月一昭（16理甲）、東島邦彦（16文乙）前列左から万波敏（17文乙）、ジョージ・カール



▲当時の在校生による台高生素描

寄稿

恩師の面影を偲んで

12年理乙　田辺信雄

台高時代の古いスクラップ・ブックの中に、私が秘かに描いた先生方の似顔があります。（下図）

恩師の面影を偲び、往時を懐しく思い浮べています。

拙筆ですが皆様にもご披露しますので、先生方への愛称ニックネームなど思い出を投稿されては如何でせうか。

愛称とはいえ、随分失礼と思われるものがあり、抹消しようかと迷いましたが、古い筆のままコピーしました。

原稿募集

一　会報締切は、四月二十日です。

二　応募は、必ず原稿用紙を用い、一行十七字詰めでお願いします。

三　不適当なものにあっては、訂正、削除をすることがありますことをご諒承下さい。

河南　宏　先生
（なまず先生）

小山　捨男　先生

根津　金吾　先生
（ねづきん先生）

加藤　平左衛門　先生
（へいざ先生）

▲当時の在校生による担任似顔絵

『蕉葉会報』についての推薦

園部逸夫（台北高校終戦時在校、元最高裁判事）

この度、復刻版『蕉葉会報』が河原功氏の解題により出版されることになった。旧制台北高等学校（通称『台高』）は、敗戦まで日本の植民地だった台湾の台北市にあった旧制高校であり、現在も建物は存在していると思う。私は当時台北一中を卒業後台高に入学と同時に学友と共に召集され、陸軍二等兵として、台湾海峡に近い山の中で、敵だった中国軍やアメリカ軍の上陸に備えていた。私は当時十六歳であった。敗戦により命拾いをし、台高に復学したが、間もなく引き揚げとなり、金沢にあった旧制第四高等学校に編入したので、台高は卒業していない。

私は、占領下に、旧制高校を廃止したのは、占領軍の誤解であり失敗であったと思っている。なぜなら日本の軍国主義と旧制高校の制度とは、全く関係がなかったからである。それどころか、当時旧制高校の気風では、表には出さないものの、むしろ自由主義や反戦思想の気風に満ちていたからである。

『蕉葉会報』は、旧制高校の歴史を知る上で真に貴重な資料であり、この度河原功氏の入念な解説により、刊行されることになった。ご同慶の至りである。戦後の教育改革は、輝かしいものが多くあったが、行き過ぎもあった。旧制高校の廃止もその一例である。旧制高校について思い出のある皆様はもとより、若い年代の諸君にも、読んで頂けることを期待してやまない。

推薦の辞

蔡　錦堂（元國立台灣師範大學　台灣史研究所　教授）

旧制台北高等学校の日本人同窓会「蕉葉会」による会誌『蕉葉会会報』（第四号から改名して『蕉葉会報』）が、一九六一年五月の第一号から二〇一三年六月の最終号まで、このたび日本の不二出版より、一般財団法人台湾協会が収蔵していた原本をもって復刻刊行されました。併せて同協会参与の河原功先生の書かれた「解題」によって、台北高校のみならず旧制高校全般の教育史に関する研究に大いに役立つことでしょう。

戦後の台湾では、台湾人の校友による「台北高等学校同学会」が既に一九四七年から活動し、同窓会名簿も編集されていましたが、日本は米国に占領され、経済復興が急務でした。日本の校友は、就学、求職などの問題を抱えており、同窓会「蕉葉会」の設立は一九五〇年と遅れ、ようやく名簿が作成されました。一九六一年から『蕉葉会会報』の発行に懸命に取り組み、二〇一三年の第一〇七号まで毎年二、三回発行され、五二年間の長きにわたりました。しかし、蕉葉会は二〇一五年、会員の高齢化により解散しました。

よく知られているとおり、台北高校は植民地時代の台湾に日本が設立した唯一の高校であり、「エリートの中のエリート」を育成しています。日本人では鹿野忠雄、東嘉生、濱田隼雄、小田稔、小田滋、上山春平等が、台湾人では李登輝、辜振甫、李鎮源、王育德、邱永漢、徐慶鐘、楊基銓等が、台北高校で育てられたエリートです。

台北高校の事績を調べるとき、現在『台北高等学校』や『獅子頭山賛歌　自治と自由の鐘が鳴る』など、台北高校の正史といえる資料や、『台湾協会報』、『愛光新聞』等に部分的に関連する資料があります。しかし、戦前植民地時代のエリート養成教育の歴史、あるいは日本と台湾の卒業生同士の「絆」、さらに比較的早い時期の台北高校の歴史を完全に理解するためには、この『蕉葉会報』が日本人と台湾人の卒業生の思い出をとらえるための最も重要な史料であります。

旧制台北高等学校同窓会誌

『蕉葉会報』

B5判・上製本・総1、074頁

解　題：河原　功（一般財団法人　台湾協会参与）

原本提供：一般財団法人　台湾協会

定　価：66、000円（本体価格60、000円＋税10％）

ISBN978-4-8350-8565-4

2022年6月刊行

著名な出身者一覧

日　本　人

有馬元治	上山春平	大原一三
小田滋	小田稔	甲斐文比古
鹿野忠雄	川平朝清	川崎寛治
川崎健	岸田實	木藤才蔵
国分直一	園部逸夫	武谷三男
豊見山昌一	中村孝志	中村地平
濱田隼雄	林主税	東嘉生
三井明	横川敏雄	吉岡英一

台　湾　人

王育霖	王育徳	魏火曜	邱永漢
許子秋	許武勇	辜寛敏	辜振甫
呉建堂	呉守禮	洪壽南	洪遜欣
黄啓瑞	黄得時	黄伯超	蔡章麟
施純仁	周財源	周百鍊	徐慶鐘
戴炎輝	張燦堂	陳五福	陳錫卿
陳新安	陳世栄	陳満益	彭明聰
楊基詮	楊思標	楊照雄	頼順生
李鎮源	李悌元	李登輝	劉濶才
林金生	林宗義	林宗毅	林挺生

関連図書のご案内

台湾引揚者関係資料集　全7巻・付録2

●B4／A5（付録2冊）判・上製・総2、552頁

●定価187、000円（本体170、000円＋税10％）

戦後、台湾引揚者らの相互支援活動のため発行した数々の新聞・会報等を収集・復刻。日台関係史研究、引揚者の足跡、労苦を辿るための重要資料である。

資料集　終戦直後の台湾　全3巻

●B5判・上製・総1、146頁

●定価82、500円（本体75、000円＋税10％）

終戦前後に台湾総督府、外務省に所属した斎藤茂氏が収集・記録した一九四五、六年の史料を編集復刻。終戦直後の混乱期における台湾の様子を知ることができる貴重資料である。

十五年戦争極秘資料集　補巻48　台湾総督府第六十回帝国議会説明資料　全5冊

●B5判・上製・総約2、070頁

●定価104、500円（本体95、000円＋税10％）

台湾総督府が帝国議会での報告のために作成した資料を復刻。残存が少なく、わずかに残る第五七回・第五八回・第六〇回帝国議会での説明資料を収録。

十五年戦争極秘資料集　補巻50　台湾議会設置関係書類

●B5判・上製・412頁

●定価27、500円（本体25、000円＋税10％）

一九二一年から三四年まで続いた植民地統治期台湾の代表的政治運動「台湾議会設置請願運動」に対して台湾総督府当局が弾圧を加えた「治警事件」（一九二三年一二月）に際し、総督府が帝国議会での報告のために用意した各種史料を復刻。

表示価格はすべて税込

不二出版
〒112-0005
東京都文京区水道2-10-10
TEL　03-5981-6704
FAX　03-5981-6705
振替　00160-2-94084